

焼跡の少年

石川 弘
エッセイ集

焼跡の少年

エッセイ集
石川 弘

エッセイ集 焼跡の少年

著者 石川 弘 (いしかわ ひろし)

1935年12月東京浅草に生れる。

中央大学商学部卒業

著書『梶井基次郎論』詩集『ある心情の下に』

『檀一雄年譜・著書目録』小説『形のないもの』

詩集『死のかけ そして』

現住所 豊島区長崎5ノ14ノ13

hi

定価 1500円

印刷・1980年5月6日

発行・1980年6月2日

発行者・浅田好明

発行所・皆美社

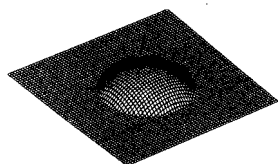
〒102 東京都千代田区九段北3ノ2ノ11

電話・東京(03)264-3905 振替東京7-148022

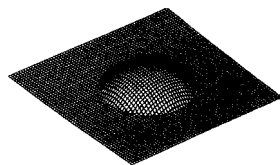
印刷所・中央精版印刷

製本所・関山製本社

乱丁・落丁本はお取替え致します



焼跡の少年
目次



焼跡の少年

I

桜の散る風景

生きもの達

シャボンダマ

昨夜の夢

砂

感想

年輪ということ

ひとり一個の感想

その日々

自由と束縛

幼なき日のことなど

68 57 52 48 45 41 38 33 22 18 9

ふたつの家

三つの春

ある老人のことから

父と子の関係

師・友人・子供

青春の神話

わが青春論

II

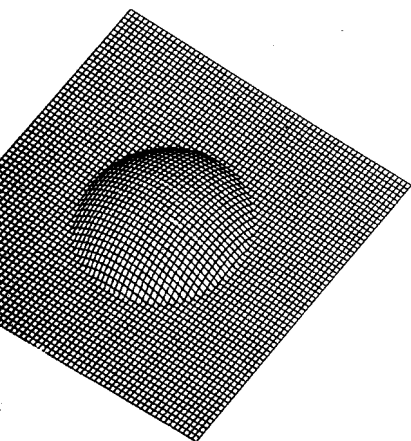
猛犬をいじる

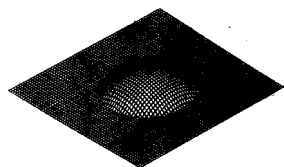
寸感

美の存在

157 155 141

112 107 101 94 87 83 72





二枚の券

あわれな幼な子

カーム・スーチンの死

五良太甫祥瑞への幻想

わが「なよたけ」

III

焼跡の少年

日向路

一飯一畳の恩義

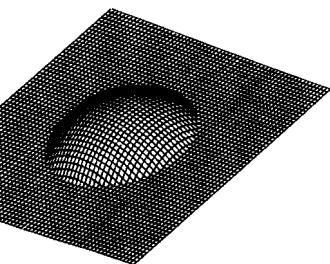
韓のくにに遊ぶ

韓国の演歌

安東五さんのこと

219 214 193 187 185 179

173 171 165 164 161



カストリと少年

222

IV

青春の根源を誠実に問う

厄年悲愁

232

母と子の永い魂のふれ合い

238

先生と祭り

241

師檀一雄

244

檀先生と音楽断想

248

生の根源

251

旅の終りに

257

あとがき

装 幀 三井秀樹
写真撮影 成田牧雄

I

桜の散る風景

空襲で焼け野原となった家跡に桜の樹とその花びら、あとひとつ沈丁花の濃い香りが漂っていた。

私はその焼跡にたたずみながら青空を眺めた。それらの美しさが少年の私の心にしみ通ったのをいまでも思い出す。私は生れてはじめて、じっとものを見詰めたものであったかのように、それをいまでも感じられる。それまで、私は母に連れられるままに、転々と引越ばかりをしていためまぐるしさを幼な心に覚えていた。

浅草、小石川、人形町、私の覚えていただけでもこれだけある。それらは絶えず下町の中でおこなわれていた。

そうしたが、もうその下町ではいく先もなく、山の手にはじめてきて、その裏手の家までも焼野原となった春の日の記憶は生れてはじめて見たもののような桜であった。私はそのとき、

十一歳であつたろうか。

だがいまその風景は遠くにおさまりよく、遠のいてしまったのであろうか。いや桜のもつ話はまだまだ私からは少しも遠のいていないのである。

そのとき、私は子供心にも怖いものから救われたような気持で朝をむかえた。数日前には火の海を母に手を取られて、逃げまわり、やっと翌日、一度遊びに連れてこられた遊園地のある多摩川園という駅の近くの大きな杉の樹のある高台の家に落着いた。

然しここでも毎晩のように空襲はつづき、防空頭巾を被ってそのたびに庭につくった防空壕に入って夜を明かした。そんな日々がつづくと思朝は大人達は確かに疲労の為か、顔は蒼ざめていた。私は桜の樹のある庭で遊んでいたけど、友達もなく、ぼんやりしていた。それに随分いままですんでいた処とは勝手が違っていた。なんと云っても樹が多いのと路上が広く、土がふんだんにあることだ。私は庭で遊ぶことにあきあきすると、知らない処にいく楽しみのような心を抱いて、裏手に出た。それはこの家に来て始めてのことであつた。

まだ土の中のところどころから白い残りの火の煙りが異様な匂いをただよわせていた。それなのに濃い花の香りがつうんと、先のほうからやって来る。私はその濃い香りだけははじめて感じ

るものであった。

みどりの葉に、紫色をしたつぶのような花びらから匂ってくるものであった。私はこれは縁日でも見かけたことのない花かと思った。

それに土の残酷さにくらべ、こういうのはコンクリートや材木や水道管や、凡て焼跡のひどさにくらべ、なんと美しいものかという気がした。私はその匂いを感じながら、その濃い匂いを消していくかのような桜の花びらを見た。幼ない心にも、いつか解放されたような思いに沈んでいた。だが果して大人達はそのとき桜を見詰めたであらうかといまにしても私に思われてならない。確か母は薄暗い部屋の中で床に入っていた。他の大人達は台所にいたであらう。そうして桜と沈丁花の咲いている裏手の焼け野原の家の人達は廃壕になった土の中から、しきりになにか掘りおこしていたのである。

一年たった。もう戦争はおわっていた。幸い私の家の人たちも、知り合いの人達も、無事生きのびることができた。

私は病弱な母のおともで、湯河原温泉の知り合いの旅館に一週間ぐらい滞在したことがあった。丁度このときも春で、桜の花びらが満開のときであった。

それは焼跡で見た桜の美しさよりも、なにかもつとぼあとしていて、花びらの数が分らないくらいであったけど、私はそのときはじめて、今度は労働運動の人達を見たのだ。私は自転車にやっと乗れるようになり、駅前まで遊びにきてしまったとき、国鉄の人達が、大きな声で歌をうたい、赤旗をふっていた。あたりに桜の樹がたくさんあって、花びらがながれ落ちていった。私は異常なこの雰囲気につきかりのまれて、あやしくゆれる花びらが、弱々しく、感じられた。それにひきかえ、歌をうたう二十数人の声は、なんと強いものかと思われたけど、私には祭りのうたげにしては、なにかとげとげしく思われていた。

そういえば、桜の花びらのあやしく弱々しく散っていく姿は、私の母の弟が、胸を患い、入院しにいく時の姿に似てもいた。それはこの翌年のことであつたらうか。

多摩川園のその家は、別棟があつて、アパートのようになっていた。長い階段があつてその崖上には桜の花びらがたれさがっていた。この病気の患者に対し、皆んな神経質になっているようだけど、とくに子供に対して、親たちはそうであつたけど、その朝だけは、階段を下りていく姿だけを見送ることを私は言われた。なぜか私の心は痛んでいた。ただ人たちを通して、叔父さんがそのとき見詰めたものは桜の花びらであつたと私はいまでも思われてならない。それは私にと

って信じていいことなのだ。そうして、三年目の春にして、はじめて桜を見た大人を私は見たのだという気がしたのであった。これは私にとって不思議なことであった。だがこれがなぜかいとおしかった。それは桜の花びらの透明さがまるで喪われていく肉体の皮膚に似て、互いにそれを感じられていくということであらうか。

そうした認識を覚えたのは勿論それ以後にして私の中で育った。確か二、三年過ぎた。その間にそこにいた何人かの人は死んでしまったし、今いずこに暮しているか分らない。そうしたことにおいて、やっと私の中で認識を深めたのである。

戦争によって廃墟になった不幸は喪われた祖国を求めることではなく、生きのびようとしたものがきの中から出発しているふうであった。少年の私にはそうしたことはなんら分ることもなく、淡々と育ってしまったのも事実である。だがその中において、桜の樹は春になるときまって美しい花びらをつけた。

私はやがて、多摩川園の家を去って、母と共に、母など一度もきたこともないというような練馬の近くの長崎町というところに住いに移した。安い家があったからである。その近くに千川という京都で云えば高瀬川のような小川があつて、その川沿いに桜の樹がたくさんある。

私は近くの女友達と、日曜日などそこを散歩したけど、その女友達は桜の樹など興味がなさそうであった。そう云えば、確かに女はそういうものにはつきりした表情をしない。私が始めて深い好意と心情をもったS子という女性もそうであった。世田谷代田のほうはいまでも桜の咲く頃は美しい光景であるけれど、私がS子と一緒にするときもやはりそうであった。だがそれらの人たちもいまや遠方にきつとおさまりよく、おさまっていることであろう。そうして桜のある風景のことなど忘却していることであろう。私は、だがあの焼野原で見た桜の花びらをはじめとして、いまでもよく覚えていて——私のそれは業というには桜は余りに美しい。桜を見ていると生命の尽きる一瞬一瞬が刻み込まれていくようだ。それは春の絵巻ということであろうか。だがやっとあの焼野原の年から十数年経ってみて、思えることは私の青春は貧しかったということだ。だが美しいものだけは見逃さなかったのは事実だ。私の眼からそれらの風景はいつも近くにありいまでも思ひ出される。

花曇りの日の花びらはどことなく寂しく感じさせるが、天気の良い、雲の湧いてくるような日のひかりの折の花びらはときに異様な美だ。花びらのひとひらひとひらはなんでもないものである。私は何人かの女人に魅せられてきたようにすっかりそれに魅せられてしまっている。前者の、生きものは、おんなは